

平成30年6月18日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370229

研究課題名(和文) 東北地方諸藩の和歌活動と国学者の和歌思想との関係を解明する新研究

研究課題名(英文) Restudy to elucidate WAKA Japanese poem activity of Tohoku district various feudal clans and relations with WAKA thought of the scholar of ancient Japanese thought and culture

研究代表者

錦 仁 (Nishiki, Hitoshi)

新潟大学・人文社会・教育科学系・フェロー

研究者番号：00125733

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：庄内藩主に宛てた貴族歌人の書状を解読し、当時の和歌指導のありかたや古今伝授のプロセスを解明した。また、仙台藩や白河藩の国学者・儒学者が編纂した地誌を分析して、その藩において和歌が果たした役割を解明した。また、歌枕について記した歌人・俳人の著作を分析して、歌枕の意義を新しい観点から解明した。たとえば、「末の松山」が古代から江戸期に至る長い期間において、中央の歌人や地方の文人たちが、それをどのように捉えて和歌を詠み、旅日記を書いているかなどを解明した。

研究成果の概要(英文)：I decoded the letter of the noble poet who addressed it to Shonai feudal lord and elucidated a process of the instruction in the way and the ancient and modern times of the then 31-syllable Japanese poem instruction. In addition, I analyzed the geographical book which a scholar of ancient Japanese thought and culture, the Confucianism person of Sendai feudal clan and the Shirakawa feudal clan edited, and a 31-syllable Japanese poem elucidated the role that I carried out in the feudal clan. In addition, I analyzed a poet, the writing of the haiku poet that I wrote down about a song pillow and elucidated the significance of the song pillow from a new point of view.

研究分野：和歌

キーワード：詠歌指導 古今伝授 藩主の和歌活動 地誌の編纂 歌枕・名所 巡見使 旅日記

### 1. 研究開始当初の背景

従来の和歌研究は京都・奈良・鎌倉・江戸といった中央に住む著名な歌人(貴族・僧侶・武士)の著名な作品(家集・歌集)を対象にし、地方とその和歌活動を無視する。無視することによって成立しているともいえる。こうした従来の研究法を否定するわけではないが、安易に踏襲すると、極めて狭い範囲、即ち中央文化の研究に終わってしまう。日本全土を視野に収める和歌研究はできないものか。

そもそも和歌は日本全土に存在する。そのような構想のもとに最初の勅撰集である『古今集』は編纂されたはずだ。たとえば東北地方にまで存する歌枕・名所などは本研究で実証するようにそれを証するものである。

和歌の最初の本格的な定義は『古今集』仮名序であるが、1 和歌は神世の昔から今に続いている、2 日本人は身分差・男女の別にかかわらず、3 だれもがどこでも歌をうたい、そして歌を詠む、とある。和歌は日本という国の神世以来という歴史、国土・領土、そこに住む人々つまり日本人の心性を示すものとして継承・存続してきた。

この定義は平安・中世・近世と継承され、明治・大正・昭和へと踏襲された。それゆえに国粹思想の温床ともなった。

よって、従来の視野の狭い和歌研究を克服し、日本全土を視野に収めた和歌研究をあらたに構築しなければならない。そこで本研究は、和歌研究の現状を批判的に捉え、新しい和歌研究を打ち立てる。

### 2. 研究の目的

上記のように、従来の中央のみに重点を置く和歌研究を克服し、新しい和歌研究を構築する。そのために、これまで無視されてきた資料が大量に埋もれているので、それらを発掘し内容を検討する。その成果をもとに、中央と地方の両方を視野に収め、日本の歴史・文化に果たした和歌の役割を正確に捉え、具体的に解明する。

特に、林子平・古川古松軒・菅江真澄・最上徳内・松浦武四郎などの蝦夷・奥州探検家たちの著作物に記された和歌に関する言説に注目する。そして、それらを賀茂真淵・本居宣長そして幕府老中・松平定信などの言説と緻密に比較・検討し、彼らの間に蝦夷および琉球を含む日本に対する共通認識があること、そういう認識をもって和歌を詠み、和歌に関する言説を書き記していることを明らかにする。

### 3. 研究の方法

従来の和歌研究者が無視してきた地方の和歌資料が大量にあるので、東北各地の図書館・博物館・資料館など悉皆調査して、資料を収集する。東北地方の藩主および藩主に仕えた国学者(儒学者を兼ねることがある)の和歌に関する著作を丹念に集めて、何を書い

ているか、かれらの思想を検討する。

たとえば、庄内藩主・酒井忠徳の残した和歌活動の資料が大量に残されている。忠徳は京都の堂上派歌人である冷泉為泰・日野資枝らを師として和歌の修養に努め、忠徳に宛てた大量の書状が残されている。それらを調べると、当時の京都歌壇と地方歌壇の関係がよくわかる。

(この問題については、研究成果報告書に大量の書状を翻刻・紹介すると共に、内容を検討して研究成果を具体的に述べた)

また、林子平・古川古松軒・菅江真澄・最上徳内などの著作を悉皆調査し、和歌に関する言説を整理・分析する。さらに各藩の文事・教育にかかわった国学者(儒学者を兼ねる)の著作を発掘・検討し、彼らの言説と幕府老中の松平定信や賀茂真淵・本居宣長などの言説とを比較・検討する。地方と中央を分離せずに検証し、当時、和歌とはいかなる意義があると認識されていたかを解明する。

### 4. 研究成果

上記のように、従来の和歌研究を批判的に継承し、それを克服すべく新しい研究方法を工夫・構築した。何よりも、これまで無視されてきた地方資料を大量に発掘した。

それらのうち重要な資料は下記の研究成果報告書に翻刻・紹介し、内容の解読・分析を行い、その成果を詳しく述べた。また、近刊の編著にその成果を踏まえて論文を書き、昨年刊行した編著にも数件の論文を発表した。

資料発掘においては、とりわけ幕府派遣の松前・奥州派遣の巡見使(国目付の巡見使を含む)一行の書き残した旅日記を数多く発掘できたことが注目される。これらの資料は歴史学の研究では取り上げられることがあったが、和歌研究では全く取り上げられてこなかった。しかし和歌に詠まれる名所・旧跡に関する記事が非常に多く、当時、和歌がいかなる意義を有するものと認識されていたかを知る重要な資料として価値があることがわかった。

結論の一つを簡単に記す。たとえば蝦夷を詠んだ和歌は平安時代の『蜻蛉日記』に見られ、天皇の支配するところとある。江戸時代に入ると数が多くなり、真淵もそう詠み、以後、国学者がその認識を継承した。重要なのは、和歌が蝦夷と琉球を含めて日本という国の全体を表象するものとして認識されることがわかったことである。

研究成果は主に下記の4冊(近刊の1冊を含む)に発表した。

#### ・研究成果報告書 1

『東北地方諸藩の和歌活動と国学者の和歌思想との関係を解明する新研究 庄内藩主・酒井忠徳に宛てた堂上歌人たちの書状その他』(私家版、平成28年2月)

・研究成果報告書2

『東北地方諸藩の和歌活動と国学者の和歌思想との関係进行新研究 特集 岡山岡田藩・仙台藩・秋田藩・庄内藩の資料とその基礎的考察』(私家版、平成29年12月経)

(注記。上記2冊は私家版であるが全国の研究機関と研究者に発送した)

・錦仁編著『日本人はなぜ、五七五七七の歌を愛してきたのか』(笠間書院、平成28年)

・錦仁・石井正己編著『文学研究の窓をあける』(笠間書院、全350頁、平成30年7月近刊)ほか。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

・錦仁「歌枕と名所 和歌に包まれた国」(『日本人はなぜ、五七五七七の歌を愛してきたのか』笠間書院、30-51頁、平成28年11月)

・錦仁「あとがきにかえて 優美な和歌の陰に」(『日本新はなぜ、五七五七七の歌を愛してきたのか』笠間書院、262-269頁)

・錦仁「菅江真澄における和歌と民俗 旅日記『伊那の中路』の方法」(『19世紀学研究』第10号、1-31頁、平成28年3月)

・錦仁「冬の旅」(『月刊 俳句界』九月号、巻頭エッセイ、98-102頁)

・錦仁「真澄における和歌 本居宣長・林子平・古川古松軒と比較して」(『19世学研究』11号、平成29年3月、1-29頁)

・錦仁「歌枕は実在するか 「末の松山」ほか」(『日本文学』vol.66号、47-57頁、平成29年5月)

・錦仁「近世における西行教授の断面」(『国語と国文学』11月号、1-15頁、平成30年校正中)

・錦仁・石井正己編著『文学研究の窓をあける』(笠間書院、全350頁、平成30年7月近刊)

・錦仁/平林香織「庄内藩主・酒井忠徳に宛てた堂上歌人たちの書状その他」(『4.研究成果』の1、1~207頁)

・錦仁「庄内藩七代藩主・酒井忠徳の和歌修養—日野資枝たちの書状を解読する」(『4.研究成果』の1、208~217頁)

・錦仁「古川古松軒『松前蝦夷地ノ圖』(岡山県立図書館蔵)を読み解く」(『4.研究成果』の2、7-56頁、平成29年12月)

・錦仁「藤堂良道『老婆心 後篇二下』(東北大学附属図書館・狩野文庫蔵)を読み解く 「琉球人の和歌」(一七六八)・「豊見城王子の和歌」(一八三二)・「浦添王子の和歌」(一八四二) その他」(『4.研究成果』の2、57-66頁、平成29年12月)

・錦仁「致道博物館蔵『日野家傳書 大秘抄』—付・解説」(『4.研究成果』の2、133-154頁)

・錦仁「北回路—新しい時代を切り開いた旅人たち(講演録。世阿弥『金島書』を読み解く)」(『4.研究成果』の2、155-172頁)

・錦仁「歌合の判詞をたどる(エッセイ。短歌結社誌『炸』より転載 1~72)」(『4.研究成果』の2、173-316頁)

・平林香織「宮城県図書館蔵・伊達文庫『詠歌一体備忘』—付・解説」(『4.研究成果』の2、67-104頁)

・稲葉有祐「『庭中花の歌発句』諸本対校—付・解説」(『4.研究成果』の2、105-118頁)

・松本麻子「致道博物館蔵『内裏進上之一巻』—付・解説」(『4.研究成果』の2、133-154頁)

(雑誌論文)(計17件)

(学会発表)(計5件)

(注記。学会発表・講演の記載を省略する)

(図書)(計4件)

(産業財産権)

出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

(その他)

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

錦 仁(新潟大学名誉教授)

研究者番号:00125733

(2)研究分担者

( )

研究者番号:

(注記。当初、志立正知(秋田大学・教授)、平田英夫(藤女子大学・教授)が研究分担者であったが、志立は大学理事に任命され、平田はサバティカルにより東京に移住したので研究分担者からはずした)

(3)連携研究者

( )

研究者番号：

(4)研究協力者

平林香織(岩手医科大学・教授)

稲葉有祐(早稲田大学・助教)

松本麻子(いわき明星大学・教授)

(注記・平林香織、稲葉有祐、松本麻子の論文は「4.研究報告」の1と「4.研究成果」の2に掲載した)